

幼児教育における音楽が育む非認知能力についての一考察

—コダーイ・システムと非認知能力との関係を中心に—

國 光 みどり

A Study of the Non-Cognitive Ability based on Music in
Child and Early Childhood Education : With a Focus on
Connection between Kodály system and Non-Cognitive Ability

Midori Kunimitsu

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

幼児教育における音楽が育む非認知能力についての一考察

—コダーイ・システムと非認知能力との関係を中心に—

A Study of the Non-Cognitive Ability based on Music in Child and Early Childhood Education : With a Focus on Connection between Kodály system and Non-Cognitive Ability

國光 みどり

Midori Kunimitsu

はじめに

『幼稚園教育要領』及び『保育所保育指針』並びに、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に基づく新たな教育・保育が平成 30 年度より施行されているが、そこでは、社会的情動スキルである非認知能力の育成への視点が新たに加えられ、従来の保育内容に加えて今後の取り組みが求められるようになった。『保育所保育指針解説』（平成 30 年度版）の中で、『保育所保育指針』における改定の背景及び経緯として、「他方、様々な研究結果の蓄積によって、乳幼児期における自尊心や自己制御、忍耐力といった主に社会情動的側面における育ちが大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかになってきた。これらの知見に基づき、保育所において保育士等や他の子どもたちと関わる経験やそのあり方は、乳幼児期以降も長期にわたって、様々な面で個人ひいては社会全体に大きな影響を与えるものとして、我が国はもとより国際的にもその重要性に対する認識が高まっている」¹⁾と改定の背景に言及し、乳幼児期の社会情動的スキル（非認知能力）の育みに基づいた保育のあり方が、今や日本のみならず、世界的にもその重要性が指摘されていることに言及している。これらの時代的方向性を受けて、日本における新しい乳幼児保育の重要な改定の視点が据えられたといっていよう。

計量的に測ることのできない能力である感性面の発達を重視したその方向性は、特に音楽による保育のあり方と密接に関連するものである。

そこで、本稿では、保育の場での音楽表現活動における非認知能力醸成の実践的な可能性について考察してみたい。その場合に、自国の音楽教育に多大な功績を残したハンガリーの作曲家・音楽

教育者コダーイ・ゾルターン (Kodály Zoltán:1882-1967) の音楽教育システムを参考にする。何故なら、コダーイの音楽教育の背景には、自国の文化的背景を念頭に置いた指導方法を創造し、子どもの音楽的能力と同時に民族的伝統文化への認識の育成を醸成するための実践を行っており、コダーイによる音楽を通じて子どもたちの環境に基づいた感性を陶冶していくことが非認知能力と深く結びついていると考える。

「子どもの未来を見据えた」我が国の乳幼児教育

平成 24 年 8 月に子ども・子育て関連 3 法の成立に基づき、平成 27 年 4 月にはこども・子育て支援新制度が本格施行された。平成 30 年度より日本の乳幼児教育の根幹である 3 法令 (『幼稚園教育要領』・『保育所保育指針』・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』) が同時に改定されるといった、わが国の保育史上画期的な変革が行われた。つまり、これら 3 つの保育教育施設に関わる法令において「教育・保育の統一化によって、教育目標の共通認識の形成、つまり日本の乳幼児教育の新たな方向性の確立」²⁾ が求められたことが画期的なのである。このことは、日本の子どもたちがどの教育・保育施設に通ったとしても、同一の乳幼児教育・保育を受けることが可能になったことを示している。

『保育所保育指針解説』(平成 30 年度版) で指摘された新たな視点である乳幼児期において、社会情動的側面である非認知能力の育成に新たな視点を包含した日本における未来の乳幼児教育の方向性について、無藤・汐見は『これまでは今の社会はこのような社会だからこどもたちにこのような力をつけていきましょう』という関係が比較的に見えやすかったのですが、今後の社会における、AI に代表される技術革新の進歩や IOT の広がり、世界のグローバル化や流動化、地球環境の変化、その他の政治的経済的そして社会的な変化、それらのスピードは速く、また予想不可能になっていきます。このような中で、子どもたちが社会で活躍する 20 年後にも通用する力の基礎を育むことが求められているのです。」³⁾ と述べ、今を生きる子どもたちが活躍する 20 年後の社会を見据えた乳幼児教育の必要性を指摘しているのである。

そのような背景の中、乳幼児期に育むべき資質・能力の方向性がより明確化され、わが国の乳幼児教育が目指す方向性への目的が具体的に示された。乳幼児期においては、子どもたちが環境を通してさまざまな直接的・具体的な経験や体験を重ねることにより、子どもたちの「あと伸びする力」と呼ばれる感性的受容能力の育成を図り、小学校以降の多様な環境への知的好奇心醸成のための「資質と能力」を確立するために、上記の 3 法令では新たに共通の「三つの柱」と「10 の姿」が提示されている。「三つの柱」とは、1.知識及び技能の基礎、2.思考力・判断力・表現力の基礎、3.学びの向かう力・人間性であり、「10 の姿」とは、『幼稚園教育要領』(平成 30 年度版) によれば、1.健康な心と体、2.自立心、3.協同性、4.道徳性・規範意識の芽生え、5.社会生活との関わり、6.思考力の芽生え、7.自然との関わり・生命尊重、8.数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、9.言葉によ

る伝え合い、10.豊かな感性と表現である。それらの資質・能力とは目に見えて数値化することができる認知能力と、数値化しにくい非認知能力であり、生活やあそびを通した総合的な指導の中で両側面が相まってバランスよく育まれ、豊かな人としての人間的素地を育むことを目標としている。

「これらの資質・能力はこれまでも幼稚園で育んできたものではあるが、各幼稚園においては実践における幼児の具体的な姿から改めて捉え、保育の充実を図ることが求められている」⁴⁾と解説され、日本における幼児教育の中では従来より、保育のねらいを「心情・意欲・態度」とし、その内面的な非認知能力における育みの重要性を大切にしてきたが、平成 30 年度の 3 法令における改訂では、改めてその社会情動的側面の育成における重要性が強調されたのである。

現在、乳幼児期を生きる子どもたちは、15 年、20 年後未来の日本において、人としての個性や一人ひとりの優れた能力をゆたかに発揮すると共に、社会の動きに適応しながら生き抜く力を持ち、子どもを取り巻く社会がどのように変化しようとも、世界中の国々とグローバルな関係性を築きながら自信をもって他者と共存していくことができる人として成長していかなければならないのである。

平成 30 年度から改定された 3 法令において重要視されている「非認知能力」の育成については、自己肯定感（自尊感情）を中心として、『乳幼児保育における音楽的表現活動から育む非認知能力の可能性－「歌う」という表現活動とそれらを支えるピアノ伴奏法の視点から－』豊岡短期大学論集第 14 号（2018）提示した筆者の拙論において既に触れたが、今回はさらにこの問題についてより発展的な課題解決について考察を進めていきたい。

乳幼児期における「非認知能力」の育みの重要性とそれを裏付ける研究の成果

近年「非認知能力」についてはすでに周知されているが、その重要性が指摘されるようになって来た背景には、アメリカのシカゴ大学ヘンリー・シュルツ特別待遇経済学部（the Henry B. Schultz Distinguished Service Professor of Economics）教授であり、1983 年ジョン・ベイツ・クラーク賞受賞、2000 年にノーベル経済学賞を受賞したジェームス・J・ヘックマン（James Joseph Heckman : 1944 - ）教授の研究成果がある。中でも乳幼児期における「ペリー就学前プロジェクト（Perry Preschool Study）」といわれる研究は、アメリカにおいて恵まれない家庭の子供を対象に幼少期の環境を実質的に改善した研究から得られたデータであり、子どもが成人するまで追跡調査をしたことから、最も信頼あるデータであるとされている。そこで先ず「ペリー就学前プロジェクト」の概要について以下に示しておきたい。

「ペリー就学前プロジェクトは 1962 年から 1967 年ミシガン州イプシランティにおいて低所得でアフリカ系 58 世帯の子供を対象に実施され、就学前の子どもに対して午前中授業を受けさせ、さらに週に一度は教師が各家庭を訪問して、90 分の指導をした。」⁵⁾

そこで行われた指導内容については、子どもの年齢や能力に応じ、非認知的特質を育てることに重

点を置くといった、子どもの自発性に重きを置いた質の高い教育を実施するとともに、教師は保護者に対しても家庭における教育のあり方や方法を指導し、家庭と学校に子どもの情報を提供するなど橋渡しを行うことになる。30週間に渡り就学前教育は続けられ、この教育を受けた子どもと就学前教育を受けなかった子どもを比較し、その後40歳まで追跡調査が行われているのである。「ペリー就学前プロジェクト」を受けた子どもたちは当初から成績が良く、IQが高くなった、という報告がなされている。しかし、4年後にはIQで測ることのできる能力に関しては効果が薄れ、まったくその効果が消失したという。つまり「14歳時点の学力調査をしたところ、就学前教育を受けた子供は受けなかった子供よりも学校へ行っている率が高く、より多くを学んでいることから成績が良かった。さまざまな社会行動についても良い影響が見られた。最終的な追跡調査（ペリー就学前プロジェクト）では、就学前教育を受けた子供は、受けなかった子供よりも学力検査の成績が高く、学歴が高く、特別支援教育の対象者が少なく、収入が多く、持ち家率が高く、生活保護受給率や逮捕歴者率が低かった。」⁶⁾と報告されているのである。

ジェームス・ヘックマン教授の40年間を費やして行われた研究において、裏付けられたことは、知的学習における認知能力を意識した早期的教育の効果は、一時的に学習効果が見られたとしても子どもたちがそれによって継続してその能力を獲得することには繋がらなかった。しかし非認知能力と呼ばれる社会情動的能力の育成を前提として行われた教育プログラムでは、子どもたちが社会を担う未来においてあと伸びし続ける能力の育成に関わる成果が確認され、いわゆる、子どもたちの「成長後の心の健康さや幸福感を高め、社会的・経済的效果を高める」⁷⁾能力の獲得に繋がっていくという揺るぎない研究結果がここに提示されたのである。

週刊『女性セブン』(第57巻第31号2019.pp.173-175)に掲載された“芦田愛菜が山中伸弥教授にインタビューするという「AI時代をどう生きるか？」”と題された対談記事⁸⁾には、このヘックマンによる研究における社会情動的能力としての非認知能力の育成の重要性について、極めて示唆的な言及が見られることから、非認知能力に関連していると思われる個所を参考にしながら次に考えていきたい。

子どもの未来に求められている非認知能力とは

AI (Artificial Intelligence : 人工知能) が人の仕事に取って代わる時代が訪れる、といわれている10年、20年後の社会とは、如何なる価値観をもって生きることが求められる世の中であるのか、また、その変化のスピードやその過程とはどのようなものなのであろうか。また、子どもたちがそのような世界を生きていくために、重要とされる力とは何かをより具体的に考えてみたい。

まず、今を生きる子どもたちが世の中を動かし、流れを担うことになる10年後、20年後の社会とは、どのような世界であるのか、について、京都大学iPS細胞研究所所長・教授で、2007年にヒトの皮膚の細胞から人工多能性幹(iPS)細胞を作成したと発表し、世界を驚愕させ、2012年にノ

ーベル生物学・医学賞を受賞した山中伸弥教授（以後、山中教授とする）、そして 2004 年兵庫県生まれで、5 歳で出演したドラマ『Mother』（日本テレビ）で脚光をあび、『マルモのおきて』（フジテレビ）で TV 連続ドラマ初主演、第 34 回日本アカデミー賞新人俳優賞ほか多数の賞を受賞し、2019 年 6 月公開の映画『海獣の子供』の声の主演など映画、ドラマ、CM と多方面に活躍し、近年初著書『まなの本棚』（小学館、2017-07）が話題となった芦田愛菜氏とによるユニークで興味深い対談の様子がその記事で紹介されている。芦田氏が山中教授に最も尋ねたかったことをテーマにした「AI 時代をどう生きるのか」について興味深い対談が行われている。

予測不可能な社会の変化 二人の対談の中で、まず数 10 年前の社会には、SF 小説のように夢の世界であったものが、現在では具現化され、浸透した「存在」に関する話題が展開されている。芦田氏が物心ついたころから存在しているスマートフォン、インターネットは今や当然の物として存在しているが、山中教授はそれらが存在していなかった時代について言及することから始めている。具体的なものとして、山中教授は、30 年前には携帯電話が存在していなかったことを示し、現代を生きる芦田氏はその時代を想像することさえできないのではないか、と世代間ギャップを語っている。

しかし、その 20 年前の 1960 年代には人間は既に行っていることや、何千年も前に創られたピラミッドなどを見ると人間のはかり知れない力を知ることになり、現代人が本当に進歩しているのであろうか、といった不安や疑問を感じていることがあると山中教授は発言している。

世界中の科学技術の最先端を行く山中教授は芦田愛菜氏との対談において、「SF 小説に書かれている」ことが現実にかかるのではなく、今や「SF 小説にも書かれていないこと」が現実にかかるほど、世の中は予想がつかないスピードで変化を遂げているかと思えば、20 年後にはきっとなくなるであろうとされていた病気が、未だに人類を苦しめ続けている、というように、科学者であっても 10 年後 20 年後の社会がどのように変化するか予想不可能であるという現実について語っている。

さらに、芦田氏は科学がこのようなスピードで進んでいる世界で AI の進歩により、人間より AI の頭脳の方がよくなり、人間が AI をコントロールできなくなるのではないかという危惧と恐怖を感じるという疑問を投げかけているが、その疑問に対して山中教授は、「医療現場では既に AI による画像の診断や、レントゲンの骨折、肺の腫瘍、皮膚病の有無など、人の目より正確な画像判断で見落としの確率が低かったり、AI に任せることで時間を節約し、その時間をさらに創造的な仕事に使ったりすることができるのではないか」という医療現場における AI の活用の利点を語っている。半面、山中教授は、懸念される AI の暴走、人間の仕事の AI 代替の可能性について、若く優秀な研究者が AI 等の分野に多いこともあり、特に技術革新が急速であることから、AI を人間が使っているつもりが実は人間が使われることになっている可能性がないとは言えないとし、10 年後の社会の在り様に少なからず不安を抱いていることを吐露している。

世の中の変化と人の価値観や常識の変化 芦田氏は、世の中の移り変わりの速さに伴い、人間の価値観や常識も変化するのではないか、という疑問を山中教授に投げかけている。山中教授は、20年、30年前には存在しなかったウェブデザイナーやユーチューバーといった職業が現代社会に存在するということは、現在中学生くらいの子どもたちが社会に出る頃には、未知の職業についている可能性が考えられると語り、新しく生まれる人の感覚や人の価値観にも何らかの変化が生じる可能性を指摘している。

さらに、AIが社長である会社が出現する可能性についても、AIの特性である「疲れない、私情を挟まず客観的な判断ができる、情報を24時間取り入れられる」という利点を活かして、会社の経営方針も人間よりAIが決める方がよい時代がくるかも知れないという予測を述べている。

芦田氏が、現代においては医者、ヘアデザイナーといった職業は、人間味があり頼りがいのある人間であってほしい、と述べるが、山中教授は、10年後、卓越した技量をもつ「AIヘアデザイナー」の出現によって、AIのヘアデザイナーへの信頼度が高まるとともに、新たな価値観がそこに定着することになる可能性も考えられる、と主張している。山中教授は新しく生まれてくる世代がもつ価値観そのものが変化する可能性を指摘し、人間でなければならない、といった「人間優位説」は根拠がない場合がある、とAIが人間の仕事を取って代わる可能性を指摘するのである。

全ての経験を自分の中にとり込むことができる力の重要性 山中教授は、この対談のまとめとして、『種の起源 On the Origin of Species』を著したチャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin : 1809-1882) の言葉を引用し、「一番生き残るのは、一番強い種でも一番頭の良い種でもない。じゃあ、どんな種かという、一番適応力がある種だそうです。」と述べ、人類が今からの社会で大切にしていけるべきことは、「柔軟性を身に付ける」ことであり、「適応力」を養うことであると指摘している。山中教授は自身が医師として仕事を始めた時のことを振り返り、医師になっても自分で自分の職場を選ぶことはできず、明日からの職場を指示されればそれが自分自身望んでいなかった病院であったとしても行かなければならない。しかし、自分がその場所でできる医療としっかりと向き合い一生懸命学ぶべきことを学ぶことにより、そこでの経験が貴重な学びとなり、医師として、人として大きくなることができると述べ、自分自身が置かれた状況を前向きに捉え、社会に対して柔軟に適応できるか、という能力の重要性を指摘している。

山中教授はAI等の技術革新による世の中の進歩、また、進歩を予想していても実際には未だ解き明かされない多くの医療技術の実態、今から先に生まれ育つ人の価値観の変様など、世の中の動きや未来の動向が見えない実態についてこの対談を通して主張しているのである。

山中教授はそこで芦田氏を含む若者たちへ重要なメッセージとして、社会生活を営む過程において、さまざまな試練や逆境を経験する際、その事実にも自暴自棄になったり、やる気を失ってしまったりするのではなく物事を肯定的に自分自身の成長の「チャンス」と捉えることができる能力である、柔軟性と適応力を含む「非認知能力」を備えることが人として、社会における成功の重要な視

点であることに言及し結んでいる。

ここで指摘されている社会情動的スキルとしての「柔軟性」と「適応力」等の育成は、先に触れた 3 つの法令の目標として求められている「三つの柱」「10 の姿」を保育実践において具現していくために、極めて重要な指摘であると考ええる。そして、その実践の手段として乳幼児教育において情動的感性的に重要視されてきた音楽が、その感性的陶冶において主要な役割を果たすものと考ええる。多様な環境の中にあつて「聴くこと」から状況を認知し、それに適応しながら音楽という創造活動への意欲・関心を育む萌芽を呼び起こすことにつながると考える。すでに、西洋音楽教育においては、より体系的な音楽的感性の醸成が試みられてきている。特に、自国の文化や伝統を子どもの「わらべうた」に注目し、独自の音楽教育によって優れた成果を上げてきたハンガリーの作曲家であり、音楽教育者であるコダーイ・ゾルターンの理論について、我国の幼児教育における有効性とその可能性について次に考えてみたい。

コダーイ・システムと非認知能力との関係性

コダーイが考える音楽教育観 コダーイが考える理想の音楽教育とはどのようなものだったのだろうか。コダーイ・システムは子ども中心の音楽教育であることは周知のことであり、「子どもにとって音楽する行為がよろこびであるように、常に子どもの側から考えられている」⁹⁾ のである。コダーイは、なぜ子どもたちに音楽が重要な価値を持っていると考えたのだろうか。また、音楽の中でもなぜ民族音楽が子どもの音楽教育に不可欠である、と考えたのであろうか。さらに、子どもたちの非認知能力の育みへの有効性について、コダーイが残した数々の象徴的な言葉を検討しながら具体的な実践について考察してみたい。

コダーイは、「子どもには真に芸術的価値のあるよいものだけを与えなければならないと言っています。『保育園における音楽』という論文の中で、「質の低い、あるいは悪い歌を子どもの耳と口に入れることによって、子どもがその人間性とハンガリー性においてどれほど害されることか。(中略) 保母たちにわかってもらいたいことは、子どもたちによい歌をうたわせることが、ただ単に装飾的美しさ、楽しさの問題ではなく、子どもの、そして人間の生命の死活問題だということである」¹⁰⁾ と主張し、コダーイは、子どもに最もふさわしく質の高い音楽とは、それぞれの民族におけるわらべ歌であるとした。また、コダーイは、子どもと関わる保育者たちに、プログラムの第一原則としてすべての子どもが音楽上の母国語、すなわち、母国のわらべうたで始めなければならないということに意識をもたせることの重要性を主張しているのである。わらべうたに基づく音楽教育者である知念直美氏は普遍的な人間教育の観点から、「わらべうたは『音楽の母国語』だからです。わらべうた以上に、その国のことばとメロディーが一体になっているものはありません。(中略) 生まれてきた子どもに、母親が初めて話しかけることばが母国語であるのと同じように、うたって聴かせる曲もその国のわらべうたであるべきです。」¹¹⁾ と述べ、音楽教育をその国の伝統音楽ではじめること

の重要性について述べている。

また、コダーイは「感情に働きかける音楽は、精神の糧だ」と語る。コダーイの理念を乳幼児教育の実践の中で実現してきたフォライ・カタリン (Cătălin Hildan, 1976-2000) は、乳幼児のこの時期を「享受するとき」と述べている。コダーイの言葉を受けた知念の実践を通して、「たくさんのわらべうたで遊んでもらうことや、歌ってもらった経験のある子どもは、気持ちよく遊んでいる時に、ひとりうたとしてわらべうたの断片を口ずさむようになる」と述べ、乳幼児期の子どもにとって、わらべうたが子どもの内面に働きかける価値の高い音楽であることを示唆している。

知念はコダーイの言葉である「わらべうたの純粹さに、人間的な価値は大変大きい。それは人間同士の結びつき、生きる喜びを高めてくれる」を引用し、わらべうたで遊ぶ中で、大人と子どもとの関係性を豊かにすることに着目している。乳児期にたくさんのわらべうたで遊んでもらう経験をした子どもは、次の成長過程において子ども同士でわらべうた遊びをするようになり、その中で子ども同士の関係性が構築されていくことに繋がることに着目している。子ども同士わらべうたで遊ぶ過程において、「集団 (社会)」に適応する能力、自立する力、自律する力、想像力、空間認知、平衡感覚等さまざまな能力が遊ぶ中で育まれると述べ、音楽的能力はもとより、さまざまな非認知能力の育みにわらべうたあそびが寄与することを指摘している。

歌は、子どものさまざまな能力を引き出していく 知念はコダーイの言葉である「音楽の諸要素は、それぞればらばらにも、価値の高い教育手段である。リズムは、注意力、集中力、決断力、神経を統御する能力を発達させる。旋律は感覚の世界の扉を開く鍵であり、強弱の諸手段と音色はわたしたちの聴器官感度を高める。そして、最後に、歌を歌うことは、からだの多様な部分の運動を意味する。」という理念を引用し、「音楽には、調和のとれた人間を育てる力があるのです。」¹²⁾ と述べ、音楽には調和のとれた人間を育てる力があることを主張している。

知念は、コダーイが「いまの時代の機械文明は、わたしたち自身も機械化してしまう。その運命からわたしたちを守るのはうたうことだけである」と考え、「人類は本当に音楽の価値を知るときによりしあわせに生きられる」と語る言葉の中に、子どもたちの未来にどのような文明社会が訪れようとも、子どもたちが、母国の言葉を大切にしたい真の価値ある音楽と出逢い、その音楽を基盤として人とかかわり、無心に遊ぶ楽しさを魂の中に刻むことが、子どもたちにとって、認知できる能力とともに、如何なる社会にも適応できる能力や柔軟性等の非認知的能力の育みに繋がり、それは、人としての成功やひいては社会全体の発展に寄与する人間性あふれる人格の形成の基礎に繋がることを見いだしているのではないだろうか。

おわりに

日本にはオルフ、ダルクロース、シュタイナー、コダーイなどの音楽教育システムが 1900 年代初頭より紹介されてきている。しかし、日本の幼児教育における音楽教育にはそれらのいずれの教育理念も根付くことはなかった。その理由の一つには、日本の音楽教育が知識偏重であり、いわゆる「認知能力」の育成ばかりが求められてきたことにあるのではないだろうか。ようやく平成 30 年度 3 法令の同時改訂により、日本の子どもたちの音楽教育に「非認知能力」の重要性という視点が組み込まれたということは、新しい音楽教育の方向性を再考する時期に至ったと考えられるのである。

乳幼児期の子どもたちの発達過程において臨界期があり、井桁容子氏は「人が育つ過程において、ある時に意味のあったものが、時期を過ぎると意味のないものになってしまうことがあります。乳幼児期の心身が育つ環境は、まさにその時だと思えます。自分自身と他者への信頼。自分なりのペースで感じて考えややってみるおもしろさと楽しさの実感。そして誰もが他の人にはない魅力をもっている大切な存在だと気づくことなど・・・。」¹³⁾と述べ、特に 3 歳未満児における発達の過程において、子どもたちが生活環境の中でおもしろさと楽しさを十分に感じて育つことの重要性を示唆している。つまり、乳幼児期のその発達過程の時期がまさにその意味のある時期であり、コダーイの指摘する良質な音楽的要素を十分に含んだ音楽で喜びをもってあそぶことが、非認知能力の育みに重要な素地を醸成することに繋がっていく、と捉えることができる可能性を井桁氏は示唆しているのである。さらに、「聴くこと」の感性を育むことによって、自らの環境を目ではなく耳で捉え、鋭敏にその変化を感じとれる感性の体得の可能性がこのコダーイの音を楽しみながら全身で反応できる子どもの育ちを保障してくれるのではないだろうか。自然の音や環境の音、両親兄弟、友だちなど様々な人の声に触れながらその気持ちを豊かに受け止めることのできる手がかりとして、ほぼ一世紀以上前のコダーイの音楽教育実践が今もその有用性を保っているのである。

子どもたちの未来に通用する力である柔軟性・適応力などの「非認知能力」の醸成に大きな可能性を包含するコダーイ・ゾルターンの音楽教育システムとその理論は、日本の保育実践における音楽教育に応用できる極めて有効な音楽教育方法の一つとして、今後に通じる実践的方法を考えていくことが求められよう。

参考文献

- 1) 厚生労働省編. (2018) 保育所保育指針解説. (p.3)株式会社フレーベル館.
- 2) 國光みどり. (2018) 乳幼児保育における音楽的表現活動から育む非認知能力の可能性－「歌う」という表現活動とそれらを支えるピアノ伴奏法の視点から－豊岡短期大学論集第 14 号.(p.40)
- 3) 無藤隆・汐見稔幸 (2017) イラストで読む幼稚園教育要領 保育所保育指針・幼保連携型認定こ

ども園教育・保育要領はわかり BOOK』, (p.9)学陽書房.

- 4) 文部科学省. (2018) 幼稚園教育要領解説. (pp.50-73).株式会社フレーベル館.
- 5) ジェームズ・J・ヘックマン著.古草秀子訳(2015)幼児教育の経済学.(p.30)東洋経済新報社.
- 6) 前掲書(p.33).
- 7) 大豆生田啓友.(2019).非認知能力を育てるあそびのレシピ 0 歳～5 歳児のあと伸びする力を高める. (p.12.) 講談社.
- 8) 久和真美子編.(2019)女性セブン第 37 巻 31 号. (pp.173-175). 小学館.
- 9) 後藤田純生監修・知念直美著.(2001)「コダーイの音楽教育から学ぶ幼児教育」『月刊クーヨン 1 月号』.(p.56).クレヨンハウス.
- 10) 前掲書、(p.56).
- 11) 前掲書、(p.56).
- 12) 前掲書、(p.57).
- 13) 井桁容子. (2011) 子どもの見方が変わるみんなの育ちの物語.(p.3)フレーベル館.

参考文献

- ボーク重子. (2018)「非認知能力」の育て方心の強い幸せな子になる 0～10 歳の家庭教育. 小学館.
- 中川弘一郎. (1980)コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践. 全音楽譜出版社.
- ポール・タフ(2017)私たちは子どもに何ができるのか 非認知能力を育み、格差に挑む. 英治出版株式会社.